

# 特集① 見直そう、海士の‘宝’

ここ海士町には、偉大な歴史・文化遺産である後鳥羽上皇や名水の誉れ高い『天川の水』など、素晴らしい‘島の宝’がたくさんあります。この秋は、それらにスポットを当てた魅力的なイベントが続きました。

10月17日、『隠岐院薪能(おきのいたきぎのう)』が隠岐神社にて開催されました。本公演は、海士町町制施行40周年記念、また後鳥羽上皇770年祭と隠岐神社の創建70年を記念する催しでもあり、企画にも協力いただいた海士町出身の徳山詳直氏(京都造形芸術大理事長、東北芸術工科大理事)がこれまで50年間温めておられた、「海士で薪能を開催したい!」という想いを実現したものでした。

開催当日まで天候が危ぶまれ、午後には激しい雷雨を伴った前線が通過しましたが、それ以降は天候も回復し、肌寒さは残ったものの、絶好のシチュエーションで公演を行う事ができました。後鳥羽院が美保関から隠岐へ遷幸になられた時の逸話にも、「隠岐へ着く頃には暴風となっていた」と有りま



大勢の観客で埋め尽くされた、隠岐神社拝殿前の特設会場

す。思えば今回の天候現象も、後鳥羽院が本行事に際しご降臨された様にも感じられました。会場は、一般、来賓、町関係者を合わせ700人を越える観客で埋め尽くされました。受付では地産地商課のサービスで、崎の梅で作った「そわか梅」が皆様に配られ、「大変おいしい」と好評を得ました。

役者は、能の観世流分家の九世観世鍊之丞(てつじょう)氏と和泉流狂言師の九世野村万蔵氏という日本を代表する両名をはじめとする鍊仙会の方々で、「この役者さんが隠岐で!?!海士で!?! 能を披露する!?! などということ自体が夢もほろろ…」であることと未だに思えてなりません。



能「小鍛冶(こかじ)」(シテ:観世鍊之丞)。その舞台のダイナミックさは息を呑むばかり



宵闇に木立がざわめくなか演じられた、狂言「隠狸(かくしだぬき)」(シテ:野村万蔵)

(総務課 高橋弘丞)

